

・感受性を鍛える

よく知っているから、知ろうとしない。つまり「見ようとしなない」し、「聞こうとしない」のです。

『かわいい子には旅をさせよ』という諺がありますが、旅をするということは、知らない場所へ行くということであり、知らない万物に囲まれるということです。その結果、必然的に「見ようとする」し、「聞こうとする」し、それは能動的に生きるということであり、感受性を鍛えることにつながるのです。

しかし年がら年中、旅をしているわけにもいきません。では旅をしないで感受性を鍛えるには、どうすれば良いのでしょうか？

答えは『万物に興味を持ち続ける』ということです。

「おもしろい」「不思議だなァ……」「なぜなんだろう？」などと思うことによって、僕たちは、通常よりも対象をよく見ようとしますし、よく聞こうとします。

その結果、僕たちの感受性は、自分でも気づかないうちに鍛えられていきます。少なくとも、衰えることはありません。

・【感情と言動の間に生じるエネルギーの差】

さて話を元に戻して、ここで一つの結論を述べると、【女性は、鍛える鍛えないに関係なく備え持った感受性が強いから、状況証拠や物証がなくても、浮気をした男性から『女の勘』で「何か」を感じとる】のです。

では、その感じとる「何か」とは、なんなのでしょう？

それは、先のシナリオに出てくる夫の「ただいま……」という言葉や、妻の視線を無視して靴を脱ぐ、などという行動ではありません。

つまり『言動』ではありません。

また、夫の内心である『思考』でもありません。

女性が感じとるのは、誰もが持っている『感情』です。

もう少し細かく言えば、【感情と言動の間に生じるエネルギーの差】です。

・『思考から感情、感情から言動への自然な流れ』

まとめて述べると【僕たちが思考すると、僕たちの内部には感情が生じ、僕たちの肉体に必ず変化が起こる】ということです。

そんな肉体の変化には、非常にわかりにくいものから、「言葉を話す」「行動を起こす」などのように、とてもわかりやすいものまでが含まれます。

・・・

赤ちゃんのように、本来の思考に別の思考で軌道修正をか

ける必要がない場合には、『思考から感情、感情から言動への自然な流れ』が、僕たち大人にも起こるということです。

【思考が発生すると、その思考に見合った感情のエネルギーが生じ、その感情のエネルギーに見合った言動がおこなわれる】ということです。

そこには、エネルギーの差が生じることはありません。

【感情のエネルギーと、言動のエネルギーが一致している】ということです。

・感情と言動の間にエネルギーの差が生じてしまう例

以上のことを先のシナリオで言えば、「ただいま……」と夫が帰ってきたときの言動は、通常なら「帰ってきたぞッ！」などという思考が発生すると、たとえばグラス一杯分の感情のエネルギーが生じて、それと同量のグラス一杯分のエネルギーで「ただいま……」と言うのに、『女の勘』によって見破られてしまう日は、夫の中に生じた別の思考「浮気がバレないようにしなきゃ……」などによって、元からある「帰ってきたぞッ！」という思考に軌道修正がかけられて、感情のエネルギーがグラス一杯分よりも多いか少ない量になってしまっているのに、「ただいま……」という言動だけは通常と同じグラス一杯分のエネルギーでおこなおうとするので、感情と言動の間にエネルギーの差が生じてしまうということです。

・「あなたの考えていることぐらい、わかるわよ」と言っている人

実は「あなたの考えていることぐらい、わかるわよ」と言っている人は、この流れを、逆にひもといているのです。それも詳細にです。

非常にわかりにくい僕たちの肉体の微細な変化、たとえばちょっとした眼の動きや唇の動きなどを見逃さずに、そこから僕たちの感情をつかみ、その感情の源である思考を推測するという方法で、僕たちの考えていることを読みとっている（と言っている）のです。

・水商売の女性たち

その結果、確かに水商売の女性たちには**水商売特有のニオイ**というものがありません。それは男性好みの服装や髪型のセンスであり、男性を気分良くさせる言葉や動作の特殊性でしたが、それだけではないということもよくわかりました。

ニオイの本質が、あったのです。

その本質とは『演じる』ということであり、客（通常は男性）の言葉を聞いているように演じる。客の言葉に納得しているように演じる。客の言葉に心を打たれたように演じる。
・・・

簡単に言えば「嘘をつく」ということであり、その行為は『思考と感情と言動を一致させることが多い名優になるためのトレーニング』とは逆のトレーニングをおこなうことになってしまい、俳優にとっては非常に好ましくないということです。

・『言葉に惑わされる』

今からでも遅くはありません。人間のさまざまな能力の基本である『感受性』に、さらなる磨きをかけてもらいたいものです。

では、僕たちが『**言葉によって相手の考えや思いを確認しようとする傾向にある**』ということは、他にどんな**弊害**を生み出すのでしょうか。

結論として言えば、『**言葉に惑わされる**』ということです。

相手が冗談でも「好きじゃない」とか「おいしくない」などと答えようものなら、その言葉を投げかけられた側は、その言葉を**重要視して、感情を揺さぶられてしまう**のです。

その究極は『**騙される**』ということです。

しかし感受性が優れていれば、その言葉には思い（感情）が正しく含まれていないので、その言葉は「冗談である」もしくは「嘘である」と判断することができ、相手が心まで嘘をついていないかぎりには、惑わされることも、騙されることもないのです。

・「ドラマの感動は、スポーツの感動には勝てない」

いずれにせよ『本当に体験したことから生まれる感情』すなわち『**真実の感情**』に勝る感情はありません。

「**ドラマの感動は、スポーツの感動には勝てない**」と僕の師匠がよく言っていましたが、それが核心です。

・どんな言葉でも大まかに捉えてはいけません。

僕たちの「感情は多重な層でできている」と考えてください。喜怒哀楽とは言いますが人間の感情は「喜」「怒」「哀」「楽」という大きな感情だけに分けられるわけではありません。「喜」「怒」「哀」「楽」という四つの感情から細分化されたいろいろな感情がいくつもの層になって、その人間の、その瞬間の感情を作り上げているのです。

だから四つの感情に代表されるような、大まかな感情だけでセリフをしゃべってはいけません。と言うより、そんなシンプルな感情だけで言動する人間は、この世の中には絶対に存在しないので、映画やドラマや舞台の翻訳セリフをそのようにしゃべられたときに、僕たちは違和感を覚えてしまうということです。

どんな言葉でも大まかに捉えてはいけません。**言葉の流れの中に存在する一つ一つの言葉には、必ず隠された意味があり、それにかかわる多くの細かい感情があります。**

・『男性は女性より他人を騙すのがヘタだ』

ここまでの結論として、『男性よりも女性の方が騙されやすい』と言えます。

なぜなら女性は、自らが持っている強い感受性で、相手の感情を強く受けとり、相手の歴史と背景よりも、その場の相手の感情を信じてしまうからです。

また『男性は女性より他人を騙すのがヘタだ』と言えます。なぜなら男性は女性よりも、全般的に感受性が劣るため、感情を生じさせて心まで嘘をつく名優になることが、女性よりも苦手だからです。

つまり女性の方が、心まで嘘をついて感情を真実にすることが得意であり、その結果、『女性も女性に騙されやすい』のですが、そのことを女性自身がよくわかっているので、『女性は男性に対するよりも、女性に対して猜疑心が強い』と言えます。

そこから考えると、女性のような感受性を持った男性なら、簡単に女性を騙すことができるということになります。しかし俳優の中に名優が少ないように、そのような男性は少ないのです。